

文法と文の組み立て

—2012 年度教員免許更新講習報告—*

浜崎 通世

本稿は、2012 年度教員免許更新講習（於愛知教育大学、8 月 7～8 日）における講習「英語圏のことばと文学教材の活用」のうち、著者担当分の内容をまとめたものである。第 1 節では、文法を「頭の中に内在化された言語知識」とする考え方を、日本語と英語のごく日常的な例を用いて説明する。第 2 節では、そうした言語知識のうち、特に文の組み立てに関する部分について考える。その際、文を「単語連結装置」とする立場と、一定の「構造」を持ったものとする立場を対比させながら、後者の立場の利点について述べる。第 3 節では、「構造」の中で動詞が果たす役割を確認する。第 4 節では、「構造」に関する最近の提案である「二項分岐の原則」、またその関連において「小節 (small clause)」の考え方を紹介する。第 5 節では、「小節」の考え方を、いわゆる五文型の枠組みに取り込む可能性を検討する。第 6 節では、前節までの考察を踏まえ、動詞 *give* に代表される与格交替構文の性質について考える。第 7 節は結語である。

1. はじめに

私たちは、第一共通棟¹ と呼ばれる建物の中にいます。そして眼前に、その天井や床や、また机などの備品を見ることができますが、そのことを

(1) 第一共通棟が見える。 (We see the First Lecture Building.)

とは言いません。「第一共通棟が見える」と言うのは、建物の外側にいて、その外側が見えているということです。別の例ですが、もし私たちが飛行機に搭乗しているとして、

(2) 飛行機が見える。 (I see the airplane.)

と誰かが言ったとします。その場合、飛行機の天井や床、また座席が見えているという意味ではもちろんなくて、例えば窓から翼など機体の一部が見えているという意味になります。²

しかし、(1) の例に戻りますが、第一共通棟を見ることが第一共通棟の外側を見ることだからと言って、外側だけが第一共通棟の全てではありません。例えば、

(3) 太郎は第一共通棟の近くにいる。 (Taro is near the First Lecture Building.)

と言えば、太郎は第一共通棟の内側ではなく、外側にいることになります。³ もし外側、つまり外壁だけが第一共通棟の全てなら、その外壁の内側にいたとしても、(3) のように言えるはずですが。結局、私たちは第一共通棟をその外壁と、外壁によって囲まれている内側を含む全体として、理解していることになります。

しかし内側は外側と違い、具体的に理解されるものではなく、もっと抽象的に理解されます。例えば第一共通棟の壁を取り払って、内部を全面的

にリフォームしたとしても、その中で授業や講義が行われるなど、一定の機能を保っていれば、依然として第一共通棟のままです。もし外壁はそのまま、内部がバーやダンスホールに改装されたなら、もはやそれを「第一共通棟」とは、少なくとも元と同じ意味では呼ばないでしょう。

結局、外側とは違って内側は、それが果たしている機能を含めて抽象的に理解されるので、見ることはできないのです。冗談めかして (1) のように言うことはできるかもしれませんが、そうでなければ、「天井」や「床」など、具体物に言及するのが普通です。通常、建物の内側において (1) のように言われても、何のことを言っているのか、途方に暮れてしまいます。それは、外側とは違って内側は、抽象的に理解するように、私たちの外界認識ができていてからとしか、説明のしようがありません。

日常的な単語が、具体物と抽象物をあらわすということを説明してきましたが、もう少し分かりやすい例を紹介します。⁴

- (4) a. The book weighs five pounds. (具体的)
- b. He wrote the book in his head, but then forgot about it. (抽象的)
- c. The book he wrote weighed five pounds. (具体的・抽象的)

the book という語句が、(4a) では具体的に、(4b) では抽象的に、(4c) では具体的であると同時に抽象的にも理解されます。これらの文を日本語に置き換えても、同じことが言えます。次の例はどうでしょうか。

- (5) 私の家は茨城県にあったけれども、いまは愛知県にある。

この例には少なくとも二つの意味があり、具体物としての家を指す場合、例えば茨城の家を愛知に移築したという意味になります。反対に抽象物としての家を指す場合、例えば茨城の賃貸アパートやマンションから、愛知の賃貸アパートやマンションへ引っ越し、あるいは愛知の親戚や知人の家に間借り、というように解釈することができるでしょう。

面白いことに、具体物を指す場合と抽象物を指す場合とで、別の単語を使い分ける事例があります。英語の **house** と **home** がその例です。次の例について考えてみて下さい。⁵ どのように意味が違いますか。

- (6) a. My house used to be in Philadelphia, but is now in Boston.
- b. My home used to be in Philadelphia, but is now in Boston.

以上、日常的な単語の意味を例にしながら、私たちが教わったことはなけれども、指摘されればなるほどと気付くようないくつかの言語事実を、紹介しました。このような、普段話している言葉についての知識は、普段は意識されることはありませんが、こうした無意識の知識がなければ、お互いにことばを用いてコミュニケーションを行うことは不可能です。

こうした知識のことを「言語能力」、または最近の用語で「I 言語」と言います。「I 言語」の I は、**internalized**（内在化された）という意味で、**externalized**（外在化された）という用語に対応します。外在化された言語、つまり「E 言語」とは、実際に話されたり書かれたりしたことばのことです。

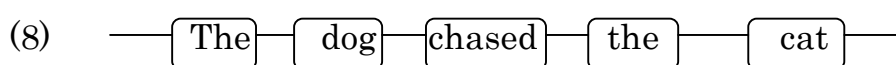
- (7) 言語 $\left\{ \begin{array}{l} \text{I 言語} \quad (\text{内在化された文法、言語能力 (competence)}) \\ \text{E 言語} \quad (\text{実際の言語運用 (performance)}) \end{array} \right.$

頭の中に内在化された文法 (I 言語) と実際の言語運用 (E 言語) とは、車のエンジンと実際の運転との関係に似ています。ちょうどエンジンが、実際の運転を目に見えないところで支えているのと同じように、実際の言語運用を目に見えないところで支えているのは、頭の中に内在化された文法です。またエンジンを積んだ車を運転してどこへでも出かけることができるのと同じように、文法を習得した私たちは、どのようなことでも自由にことばで表現することが可能です。

この内在化された文法、つまり I 言語の中身を明らかにすることが、「生成文法」と呼ばれる分野の目標です。生成、英語で **generative**、と言うのは、「明示的に述べる」と言う程度の意味です。⁶ 簡単にいえば、ヒトが持っている、「教わったことがないのに、識っている知識」を、特に言語の場合について、明らかにしようとする分野です。人間が持って生まれた認知能力の一端を、言語の研究を通して明らかにするということです。

2. 単語連結装置から句構造規則へ

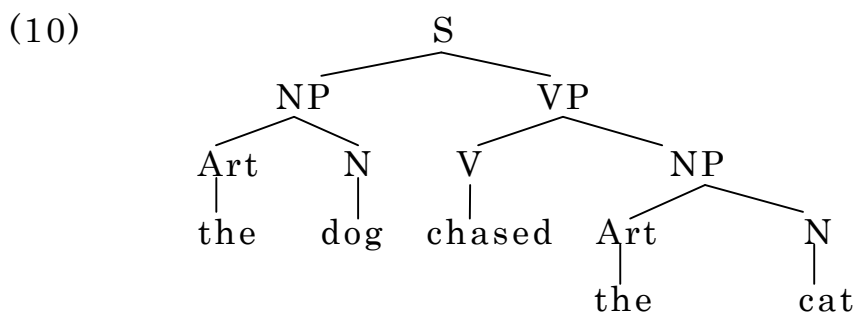
さて、文の組み立てについて、教わらなくても識っている知識とは何でしょうか。まず言えることは、文は (8) に示すような単語の数珠つなぎではないということです。⁷ というのは、隣り合っている単語同士でも、例えば **the** と **dog**、あるいは **the** と **cat** は、一つのまとまりと考えられますが、**chased** と **the** は、どう考えても一つのまとまりとは言えません。



このような文の特性に着目して、単語同士の結びつきの型をパターン化したものを、句構造規則と言います。(9)に示す通りです。⁸ 例えば最初の規則は、「S は NP と VP に展開される」と読みます。S は Sentence、NP は Noun Phrase (名詞句)、VP は Verb Phrase (動詞句) のことです。それぞれ Noun (名詞)、あるいは Verb (動詞) を中心とした単語のまとまり、という意味です。NP はさらに Article (冠詞) と N (名詞) に展開され、VP は V (動詞) と NP (名詞句) に展開されます。冠詞や名詞また動詞は、それぞれ右列に示す規則に従って、具体的な語彙に書き換えられます。

- | | |
|---------------|--------------------|
| (9) S → NP VP | Art → the, etc. |
| NP → Art N | N → dog, cat, etc. |
| VP → V NP | V → chase, etc. |

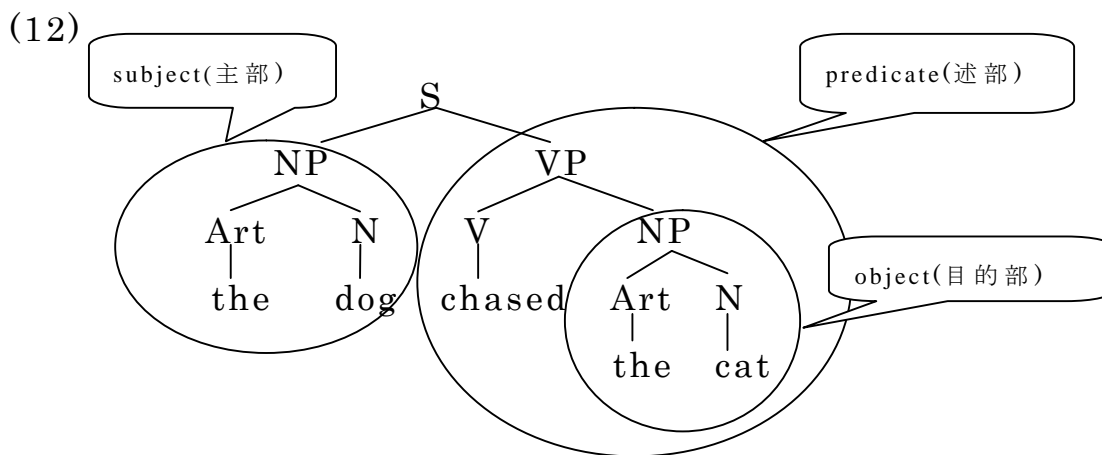
これらの規則を用いて派生される構造を示したのが、(10)の樹形図です。



この樹形図には、以下のようなまとまりが表されています。

- (11) a. [the] と [dog]、[the] と [cat] は一つのまとまり
 ⇒ NP (Noun Phrase)
- b. [chased] と [the cat] は一つのまとまり
 ⇒ VP (Verb Phrase)
- c. [the dog chased the cat] 全体は一つのまとまり
 ⇒ S (Sentence)

また、文を構成するそれぞれのまとまりに、どのような働きがあるかを示したのが、(12) の図です。すでに明らかのように、文の主語や述語、また目的語となるのは、語ではないので、主部、述部、目的部と表記してあります。文の主部、述部、また目的部となるのは、語ではなく句なのです。



(13) の例文を見て下さい。Jane の好きなネコのことを、(13a) では Tiger、(13b) では that old tabby cat、また (13c) では that old tabby cat with a silver bell と表現していますが、どれも動詞 love の目的部です。

- (13) a. Jane loves [Tiger].
 b. Jane loves [that old tabby cat].
 c. Jane loves [that old tabby cat with a silver bell].

さらに受動化のような文法規則も、単語ではなく句に適用されます。したがって (14a) では Tiger が、(14b) では that old tabby cat が、また (14c) では that old tabby cat with a silver bell が、それぞれ文の目的語の位置から主語の位置へ、「移動」しています。(15a-c) に示す通りです。つまり、本来動詞 love の目的語として解釈されるべきこれらの語句が、受動文では主語の位置に表現されています。

- (14) a. [Tiger] is loved by Jane.
 b. [That old tabby cat] is loved by Jane.
 c. [That old tabby cat with a silver bell] is loved by Jane.
- (15) a. _____ is loved [Tiger] by Jane.
 b. _____ is loved [that old tabby cat] by Jane.
 c. _____ is loved [that old tabby cat with a silver bell] by Jane.

ただし単語一つでも、句としての働きをすることに注意して下さい。何故なら Tiger は、that old tabby cat や、また that old tabby cat with a silver bell と同じように、動詞 love の目的語になり (13a-c)、受動態の主語になります (14a-c)。また同じように代名詞の it で置き換えることができます。

- (16) (13a-c) ⇒ *Jane loves it. (it = Tiger / that old tabby cat / that old tabby cat with a silver bell)*

結局、句とは、文の中で一定の働きをする文法的な単位のこと
で、単語一つでも句として成立する場合があります、また二つ以上
の単語から、句が成立する場合もあるということです。⁹

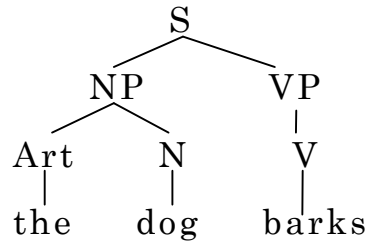
3. 句構造規則から動詞中心の組み立てへ

以上、文は、単語を順番に連結させたものではなく、単語同
士が一定のパターンにしたがい、句という単位にまとめられ、
出来上がっているということを説明しました。

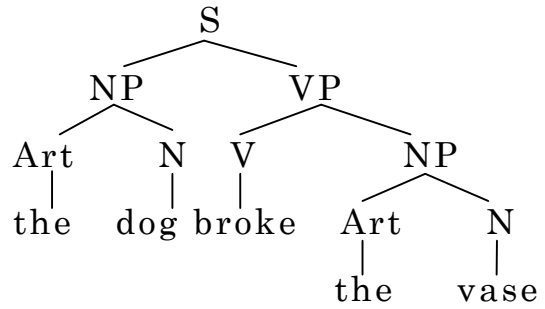
そこであらためて、(9)の句構造規則と(10)の樹形図を見
ると、文というのは、上から下へ、規則に従って展開されるこ
とにより、組み立てられるように思われます。しかし実際には、
(9)のような規則だけではなく、個々の語彙の性質、特に動詞
の性質が、構造の決定に重要な役割を果たします。

例えば(17)に示すように、動詞句が動詞だけから成り立っ
ているのか、または(18)に示すように、動詞と名詞句とから
成り立っているのかは、当該の動詞の個別的な性質によります。
つまり(17)で動詞 *bark* は、下位範疇化枠によって示される
通り、名詞句をとりません。¹⁰ それに対して動詞 *break* は、
(18)の下位範疇化枠によって示される通り、名詞句を一つと
ります。このように動詞の個別的な性質が、動詞句の構造に反
映されます。¹¹

(17) *bark*, V [+ ___]

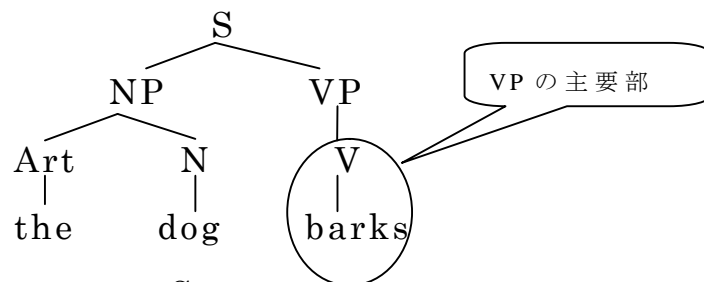


(18) *break*, V, [+ ___ NP]

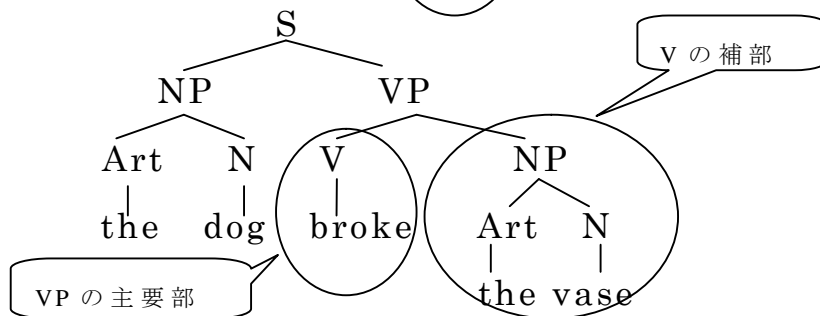


したがって動詞は、譬えると動詞句の社長として、動詞句内の人事権を握っていると言えます。専門的な用語では、動詞は動詞句の「主要部」であると言います。(19)に示す通り、動詞 *bark* の場合には、その動詞句は社長のみの組織となりますが、(20)に示すように動詞 *break* の場合には、その動詞句には社長の他に、いわば社長の握る人事権によって選ばれる部下、専門的な用語で「補部」と呼ばれる句が一つ存在します。

(19)

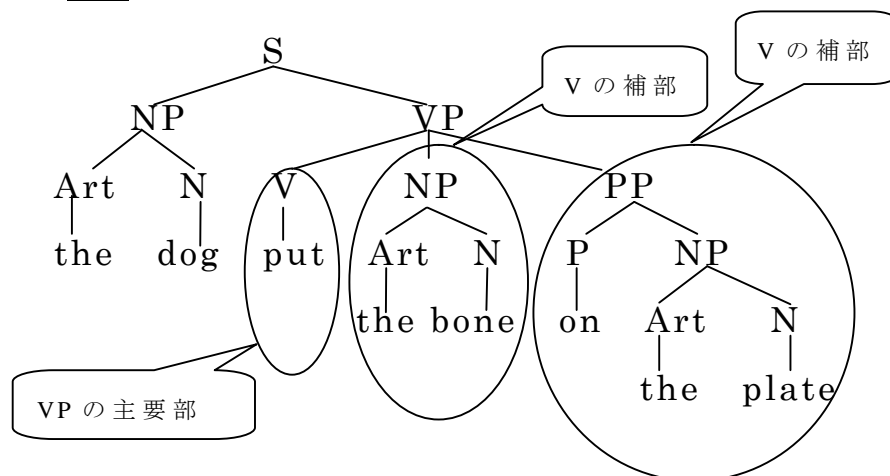


(20)



補部を二つ持つ動詞の例として、put があります。動詞 put は (21) に示すように、名詞句と前置詞句 (on the plate) の、二つの補部を持ちます。

(21) *put*, V [+ ___ NP PP]

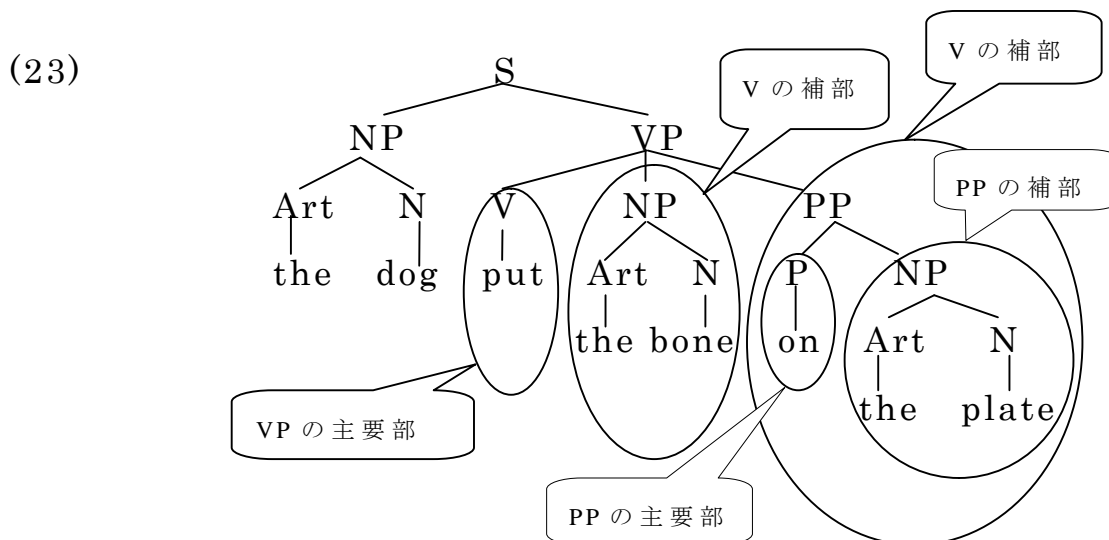


また (22a-b) のように、どちらかの補部を省くと、非文です。

(22) a. *the dog put [the bone].

b. *the dog put [on the plate].

前置詞 on は前置詞句 (PP) の主要部であり、the plate はその補部です。そのことを (23) に示します。



(23) では、社長と部下から成る一つの「組織」、ここでは前置詞句 PP が、そのままそっくり別の組織、つまり動詞句 VP に、補部として組み込まれていることに注意して下さい。結果として、一種の入れ子型の構造が生じます。

それでは練習問題です。(24a-b) で、主文動詞の *ridicule* と *persuade* の「部下」は、それぞれ何人でしょうか。¹²

- (24) a. Pat *ridiculed* Harry's theory that the moon is made of green cheese.
b. Pat *persuaded* Harry's students that the moon is made of green cheese.

正解は、(24a) では一人、(24b) では二人です。(25) と (26) の受動文を参考にして下さい。

- (25) a. [Harry's theory that the moon is made of green cheese] was ridiculed by Pat.
b. *Harry's students that the moon is made of green cheese was persuaded by Pat.
(26) [Harry's students] were persuaded by Pat that the moon is made of green cheese.

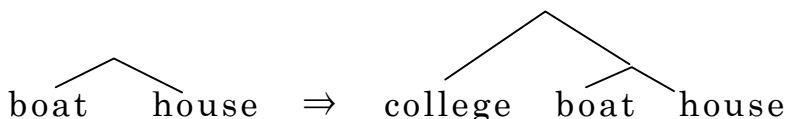
4. 二項分岐の原則

ここまで、文は、単語同士が一定のパターンにしたがって、句という単位にまとめられ、成立していることを説明しました。また動詞の性質が、構造を決定する上で、決定的な役割を果た

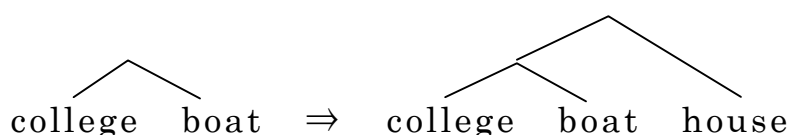
していることを見ました。

ところで、これまで出てきた樹形図、例えば (17) や (18) では、文の構造が全て二つに枝分かれしていることに気付きます。このように、言語表現の構造が二つずつに枝分かれすることを、「二項分岐の原則」と言います。¹³ 分かりやすい例として、(27) に示すような複合語の例、つまり二つ以上の単語を組み合わせる新しい単語を作る場合、について考えましょう。(28) と (29) は、college boat house の、二つの構造を示したものです。この二つの構造の違いは、併合の順序の違いによって生じたものです。併合 (merge) とは、二つの言語表現を組み合わせ、新しい言語表現をつくる操作のことです。boat と house を先に併合させて、その後で college を併合させた場合、(28) に示す構造になります。一方、college と boat を先に併合させて、その後で house を併合させると、(29) のような構造になります。この二つの構造は、それぞれ別の意味と結びつきます。

(27) college boat house

(28)  \Rightarrow college boat house

The diagram for (28) shows a tree structure where 'boat' and 'house' are merged first into a parent node, and then 'college' is merged with that parent node. This is followed by an arrow pointing to the text 'college boat house'.

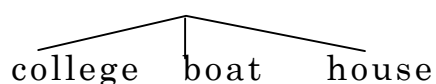
(29)  \Rightarrow college boat house

The diagram for (29) shows a tree structure where 'college' and 'boat' are merged first into a parent node, and then 'house' is merged with that parent node. This is followed by an arrow pointing to the text 'college boat house'.

重要なことは、このとき (30) に示すように、二つではなく

三つに枝分かれしていると、この二つの意味を区別できないということです。college と boat、また house とが、一列に並んでしまうため、それぞれの語の間の関係が、明らかではないからです。したがって少なくとも、(27) のような例を見る限り、「二項分岐の原則」は、言語表現の各構成要素間の関係を、あいまいさなく示すために必要であると言えます。

(30)

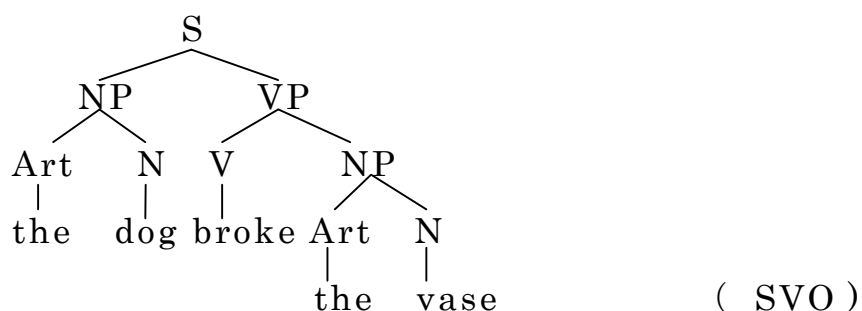


さて複合語から文の構造へ話を戻すと、(17) や (18) では、樹形図が全て二つに枝分かれしています。

(31) (=17)

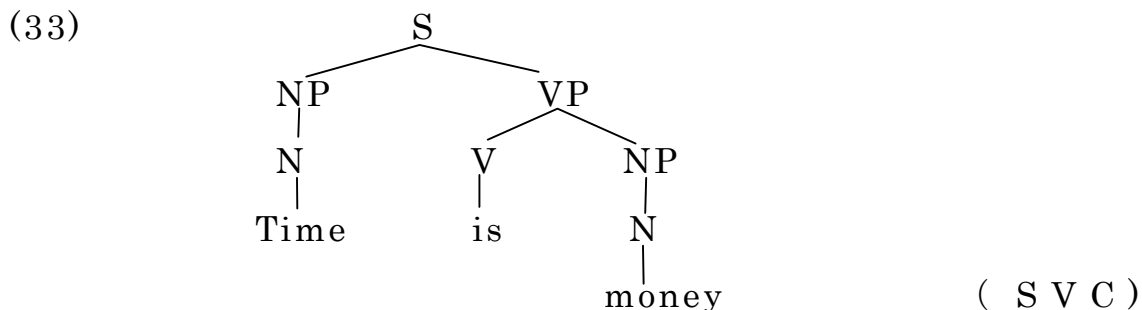


(32) (=18)

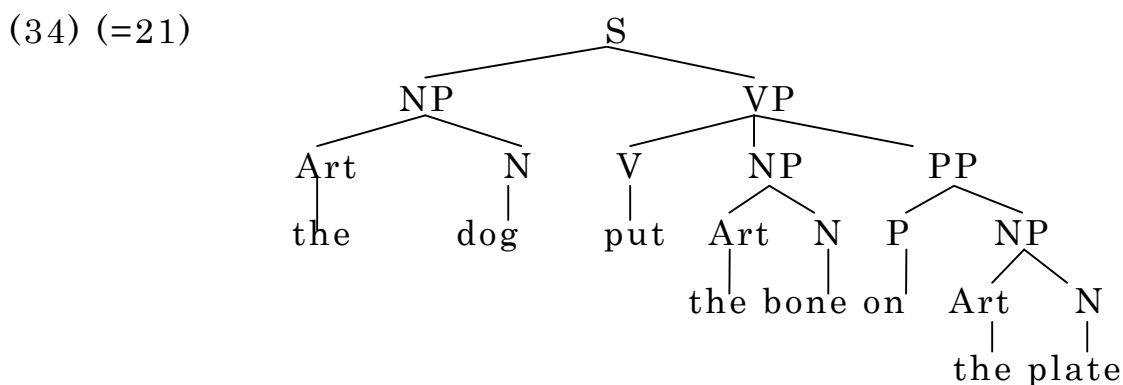


このように、SV の構文である (31) や、また SVO の構文である (32) では、「二項分岐の原則」の観点から特に問題は生

じません。(33) に示す SVC の構文の場合も同様です。



それに対して問題が生じるのは、(21) のように SVO の構文をとる動詞が、場所を表す副詞的語句 (Adverbial) をとる場合です。



(35) も同様の例です。

(35) You should set that dish in the middle.

(安井 (1978: 161))

ちなみに (34) や (35) は、次節で説明するように、七文型では SVOA とされる構文で (Cf. Greenbaum and Quirk (1990: 203))、動詞は副詞的語句を省略することができません。

さて (34) の文では、 the bone と on the plate は、意味の上で主部と述部の関係になります。(36) に示す通りです。

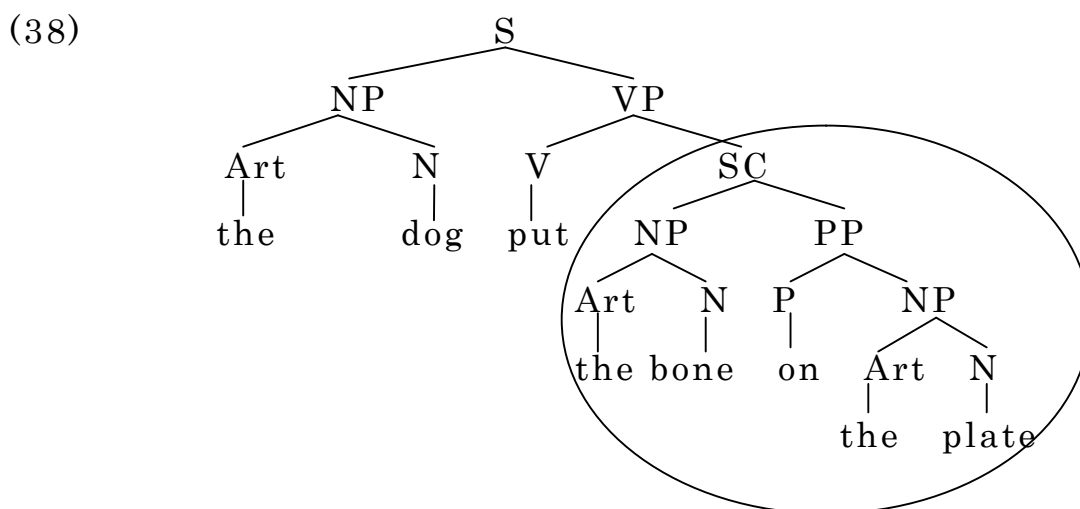
(36) The dog put the bone on the plate. ⇒ "The bone is on the plate."

このように、主部と述部と言う形式を備えている点で「節」と言えるけれども、主部と述部との間に be 動詞等の要素がない場合、そのまとまりを小節 (small clause) と言います。

(37) The dog put (the bone on the plate)

↑
小節 (small clause)

「小節」の考え方を採用すると、(34) の構造を「二項分岐の原則」に従う形で、(38) のように表すことができます。小節の部分を円で図示し、該当する節点を「SC」と表示します。



5. 小節と五文型

第4節では、動詞が二つの補部をとる(34)や(35)のような例を、小節を含む構文として分析しました。第5節では、(39)に示すいわゆる五文型と、小節の考え方との関係について、考えてみたいと思います。

- (39) 1. The dog barks. (SV)
2. Time is money. (SVC)
3. The dog broke the vase. (SVO)
4. The trainer gave the dolphin a treat. (SVOO)
5. John believes Mary a liar. (SVOC)

小節の考え方が関わってくるのは、(34)と(35)で見たように、補部が二つある場合ですので、五文型のうち第四文型(SVOO)と第五文型(SVOC)が該当します。このうち本節では、まず第五文型(SVOC)の構文について説明します。

(40) John believes Mary a liar.

(40) では Mary a liar の部分を、小節とみなすことができます。

(41) John believes Mary a liar.



小節 (small clause)

(40) の文は、「メアリーを信じる」ではなく、「メアリーが嘘

つきであると信じる」という意味です。つまり Mary ではなく Mary a liar 全体が、動詞 believe の目的部となります。仮に Mary が動詞 believe の目的部であるなら、John が Mary のことを信じながら、同時に彼女が嘘つきであると信じるといふ、矛盾した状況を表すことになってしまいます。

さて五文型の問題は、前節 (34) や (35) のような構文を、このままでは取り込むことができないということです。この点に関連して、(42) に示す七文型の考え方を紹介します。

- (42) 1. the dog barks. (SV)
2. the dog broke the vase. (SVO)
3. Time is money. (SVC)
4. My office is on the sixth floor. (SVA)
5. The trainer gave the dolphin a treat. (SVOO)
6. John believes Mary a liar. (SVOC)
7. The dog put the bone on the plate. (SVOA)
- (Cf. Greenbaum and Quirk (1990: 204))

A は副詞的語句 (Adverbial) です。また C は、一般に名詞句と形容詞句であるとされます。

- (43) The complement is typically a noun phrase or an adjective phrase.
- (Greenbaum and Quirk (1990: 207))

(42) の七文型で注意すべきことは、3 の SVC と 4 の SVA、

また 6 の SVOC と 7 の SVOA との関係です。最初に 3 の SVC と 4 の SVA の関係について見ます。(42) の 4 では、*my office = on the sixth floor* という関係が成り立ちますが、*on the sixth floor* が前置詞句であるという理由により、SVC ではなく SVA に分類されます。同じような理由により、以下の (44a) は SVC、また (44b-e) は SVA に分類されます。¹⁴

- (44) a. Daniel stayed very quiet.
(Greenbaum and Quirk (1990, p. 206))
- b. Daniel stayed in bed. (ibid.)
- c. She couldn't stay at my place. (*About a boy*)
- d. My advice is just, you know, *keep out of people's way*, . . . (ibid.)
- e. *I kept trying to leave*, but there was a lot going on.
(*The Devil Wears Prada*)

(44a) では形容詞句 *very quiet* が、(44b-d) では前置詞句 *in bed*、*at my place*、また *out of people's way* (目立たないようにする) が、そして (44e) では動詞句 (現在分詞) *trying to leave* が、それぞれ文の主部とイコールの関係になります。つまり、これらの形容詞句や前置詞句、また動詞句は、文法範疇の違いを別にすれば、いずれも文の主部に対する述部です。こうした共通性を、七文型では捉えることができません。

次に 6 の SVOC と 7 の SVOA との関係についてです。(42) の 7 では、*the bone = on the plate* という関係が成立しますが、やはり *on the plate* が前置詞句であるという理由に

より、SVOC ではなく SVOA に分類されます。同様の理由から、(45a) は SVOC、(45b-c) は SVOA に分類されます。

(45) a. Linda kept Daniel very quiet.

(Greenbaum and Quirk (1990: 206))

b. Linda kept Daniel in bed. (ibid.)

c. I'd like my Starbucks waiting.

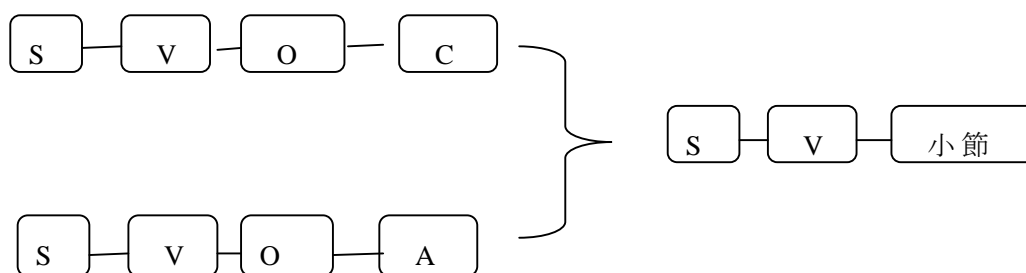
(*The Devil Wears Prada*)

(45a) では形容詞句 *very quiet* が、(45b)では前置詞句 *in bed* が、また (45c) では動詞句 (現在分詞) *waiting* が、それぞれ動詞の目的部と主述関係になります。これらの語句は、文法範疇は異なっているとしても、どれも動詞の目的部に対する述部です。この共通性を、やはり七文型では捉えることができません。

このように、七文型には動詞が義務的な副詞的語句を要求する場合についての言及があり、その点で五文型に比べて優れているように見えますが、かえって構文上の共通性を捉えきれていないという欠点があります。

むしろ、形容詞句、名詞句、前置詞句、動詞句など、文法範疇という考え方を越えて、それらに共通する述部としての働きに着目することにより、SVOC の構文と SVOA の構文との共通性を捉えることが可能になります。このことを (46) に図示します。

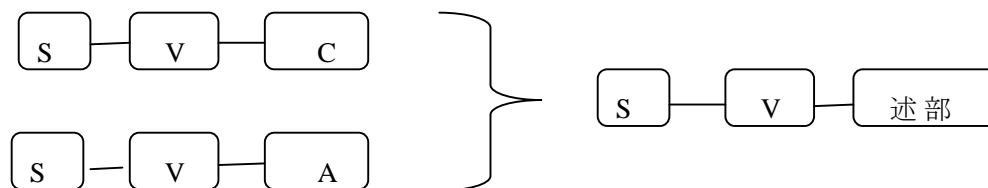
(46)



小節 = 主部 + 述部 (形容詞句、名詞句、前置詞句、動詞句, etc.)

同様の考え方により、(44a-e) で説明した SVC 構文と SVA 構文と共通性を捉えることが可能になります。

(47)



述部 = 形容詞句、名詞句、前置詞句、動詞句, etc.

実際、Greenbaum and Quirk (1990: 208) も認めているように、A の記号で表される義務的な副詞的語句 (Adverbial) と、C の記号で表される補語 (Complement) との区別には、曖昧な点があります。例えば名詞 *suspects* や形容詞 *healthy* を補語として用いた (48a-b) の例と、前置詞句 *under suspicion*、また *in good health* を副詞的語句として用いた (49a-b) の例は、意味の上でほとんど同義です。

- (48) a. They were suspects.
b. Norma was healthy.
- (49) a. They were under suspicion.
b. Norma was in good health.

(Greenbaum and Quirk (1990: 208))

したがって、(48a-b) を SVC、(49a-b) を SVA として、別々の構文に分類するのではなく、同じ事態を表現するのに異なる述部形式を用いた、本質的には同一の構文とする方が、理にかなっていると言えます。

第 5 節へ入る前に、(46) と (47) の図式について、注意すべき点をまとめます。それは、次のような例に関する問題です。

- (50) This job pays handsomely.
(51) They treated her kindly.

(Greenbaum and Quirk (1990: 207))

(50) の *handsomely*、また (51) の *kindly* は、動詞にとって必須の要素で、省略することができません。

- (52) *This job pays.
(53) *They treated her.

したがって、(42) に示した七文型では、それぞれ SVA と SVOA に分類されます。つまり、(50) と (51) の *handsomely* と *kindly* は、動詞の意味によって要求される、義務的な副詞

的語句であるということです。

しかしこれらの文において、*handsomely* が *this job* に対して、また *kindly* が *her* に対して、述部としての機能を果たしているとは言えません。つまり、単純に $SVOA = SVOC$ 、また $SVA = SVC$ とはいかない例があるということです。

こうした事例も勘案して、動詞によって義務的に要求される副詞的語句を全て、従来の五文型でいう補語とみなし、これらを (54) のようにまとめる提案があります。¹⁵

- (54) 1. *SV*
the dog barks.
2. *SVC*
a. Time is money. (SVC: S=C)
b. My office is on the sixth floor. (SVA: S=A)
c. This job pays handsomely. (SVA: S≠A)
3. *SVO*
The dog broke the vase.
4. *SVOO*
The trainer gave the dolphin a treat.
5. *SVOC*
a. John believes Mary a liar. (SVOC: O=C)
b. The dog put the bone on the plate. (SVOA: O=A)
c. They treated her kindly. (SVOA: O≠A)

この分類は、副詞的語句の述部としての働きの有無に関わらず、

それが動詞によって要求される要素であるか否かを基準として、従来の英語の五文型のいずれかに、(50) や (51) の例を当てはめてみる考え方です。純粹に動詞の統語的な性質のみに着目することにより、文型の簡素化が実現されています。

ここまでの議論をまとめると、できるだけ簡潔に英語の構文を把握するという立場から、(54) に示す修正された五文型を基本に据えることとなります。そして、SVC と SVOC については、それぞれ C の文法範疇に関わらず、S と C、あるいは O と C との間に主述関係が成立する場合、つまり (47) と (46) に図示したような場合を、典型例として捉えるということになります。

6. 動詞 *give* について

最後に、第四文型を小節の考え方により分析する考え方を紹介します。(55) に示すように、例えば動詞 *give* は、名詞句と前置詞句をとる場合と (The trainer gave a treat to the dolphin. : 与格構文)、名詞句を二つとる場合があります (The trainer gave the dolphin a treat. : 二重目的語構文)。

(55) *give*, V [+ __ NP PP]

[+ __ NP NP]

a. The trainer gave [a treat] [to the dolphin].

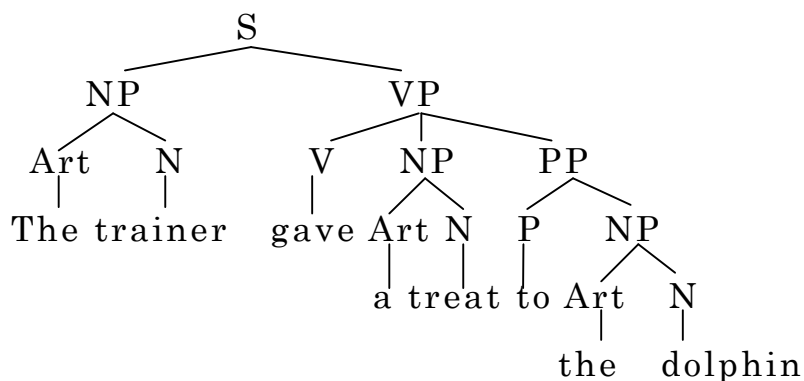
(与格構文)

b. The trainer gave [the dolphin] [a treat].

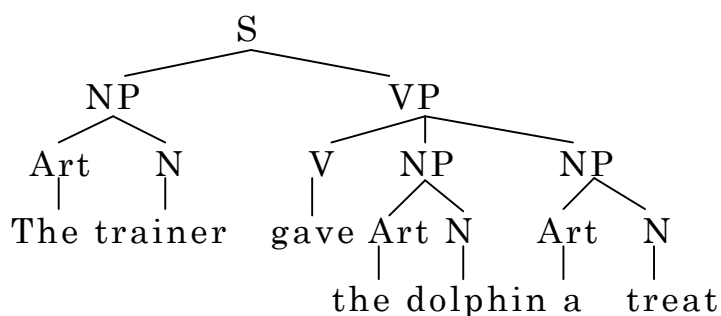
(二重目的語構文)

「二項分岐の原則」に従い、これらの文の構造は、(56a-b) のように、動詞句が三つに枝分かれするのではなく、(57a-b) のように、二つに枝分かれすると考えます。このとき (57a) では a treat と to the dolphin が、また (57b) では the dolphin と a treat が、それぞれ「小節」を構成します。

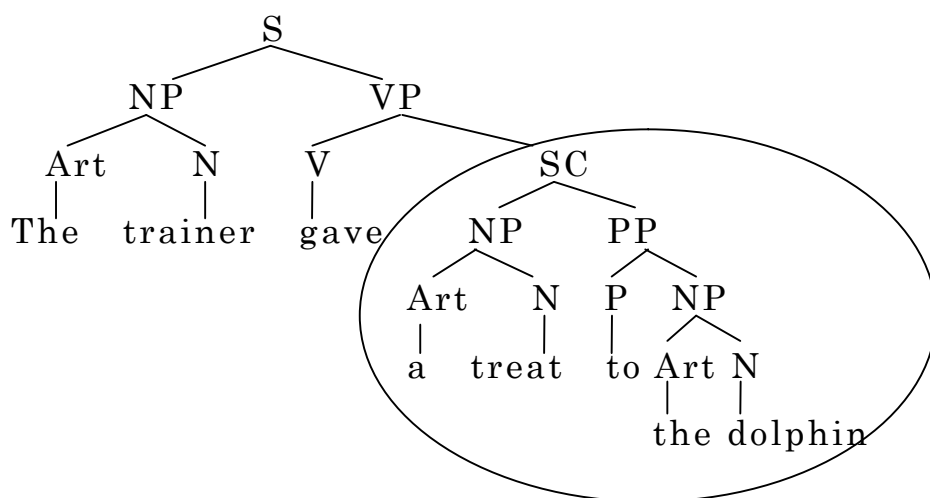
(56) a.

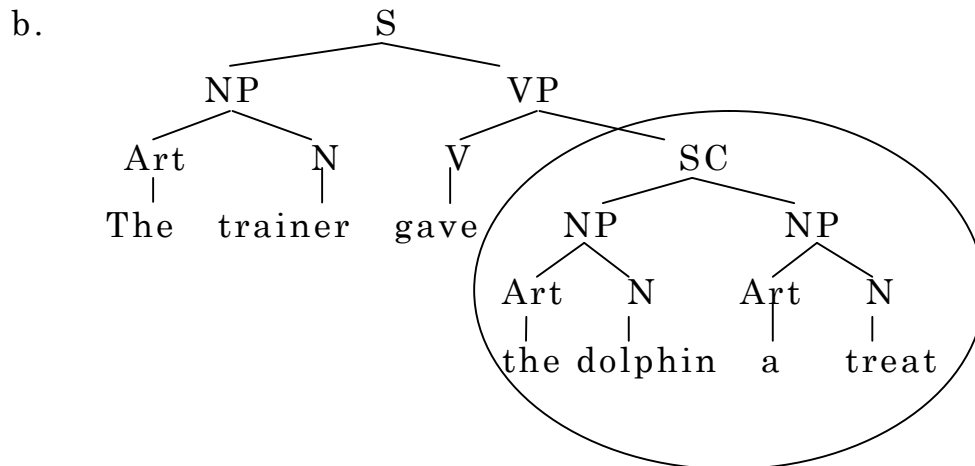


b.



(57) a.





このように動詞 *give* のとる二つの構文に対して、「二項分岐の原則」に基づいた (57a-b) のような構造を仮定することは、意味の上で次のように説明されます。まず小節の主部と述部は、意味上 “be” によって繋がれる場合と、“have” によって繋がれる場合とがあります。¹⁶ 例えば (58a-b) に示す通りです。(58a) では *Mary* と *liar*、また *Mary* と *unhappy* が、それぞれ意味の上で “be” によって繋がれ、「小節」を構成します。また (58b) では *our baby* と *this sweater* とが、意味の上で “have” によって繋がれ、小節を構成します。

(58) a. “be”によって繋がれる場合

John believes [Mary a liar]. ⇒ “Mary is a liar.”

John made [Mary unhappy]. ⇒ “Mary is unhappy.”

b. “have”によって繋がれる場合¹⁷

I knitted [our baby this sweater]. ⇒ “Our baby has this sweater.”

この考え方を (57a-b) に応用して、前者の場合 *a treat* と *to*

the dolphin が "be" によって繋がれ、後者の場合 the dolphin と a treat が "have" によって繋がれるとします。

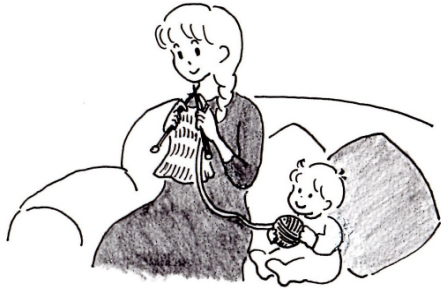
(59) a. The trainer gave [a treat to the dolphin]. ⇒ “A treat is to the dolphin.”

b. The trainer gave [the dolphin a treat]. ⇒ “The dolphin has a treat.”

すると、(59b) の「二重目的語構文」の場合、第一目的語である「イルカ：the dolphin」は、「調教師：the trainer」の手元から離れた「ごちそう：a treat」が向かう単なる「着点」ではなく、イルカが実際に、ごちそうを受け取っていることを含意すると予測されます。

別の例ですが、実際 (58b) を第三文型に書き換えた (60) の場合、これから生まれる赤ちゃんのためにセーターを編んだという解釈が可能である一方で、二重目的語構文である (58b) の場合には、そのような解釈が不自然であることが指摘されています。¹⁸ (58b) では、赤ちゃんがすでに生まれていることが前提となります。生まれる前の赤ちゃんでは、「編んだセーター」を受け取れません。

(60) I knitted this sweater for our baby.



そこで練習問題です。何故 (61a) が英語として自然で (61b) が不自然か、考えてみて下さい。¹⁹

- (61) a. Mary taught French to Paul (but the idiot still doesn't speak it properly.)
b. Mary taught Paul French (*but the idiot still doesn't speak it properly.)

(61b) の二重目的語構文では、“Paul has French”、つまりポールがフランス語を習得したことが含意されます。したがって but 以下の内容は、主節の内容と矛盾します。(62a-b)、また (63a-b) についても、同様に考えてみて下さい。

- (62) a. Mary sent a letter to London.
b. *Mary sent London a letter.
- (63) a. The collision sent the car to the other side of the gas station.
b. *The collision sent the other side of the gas station the car.

(62b) と (63b) の二重目的語構文では、それぞれ London has a letter、また The other side of the gas station has the car. が含意されます。したがって「ロンドン」や、「ガソリンスタンドの向かい」のような場所が、「メアリーが送った手紙」や、また「衝突によって飛ばされた車」の持ち主として解釈されることになり、意味的に矛盾をきたします。

もちろん、(62b) の場合、London という語に対して、ロンドンにいる親戚とか、また、どこかの会社のロンドン支社あるいはその社員といった、具体的な手紙の受け取り手がイメージされていれば、話は別です。²⁰

7. 終わりに

Chomsky (1988) から、一節を引用します。

(64) Use your common sense and use your experience and don't listen too much to the scientists, unless you find that what they say is really of practical value and of assistance in understanding the problem you face, as sometimes it truly is. (Chomsky (1988: 182))

言語教育の現場では、理屈よりもむしろ常識や経験が重要であり、自分たちの経験という城をしっかりと確立させた上で、もし実際的な問題を解決する上で必要なら、理屈に耳を傾けるとするのが、正しい態度だと思います。しかし、それにもかかわらず、文法研究の立場から、引用の最後のワンフレーズ、as sometimes it truly is. (時には本当に役に立つものである) が、

現実のものとなるように願いつつ、結びとしたいと思います。

* 本稿のうち第5節を除く部分は、文部科学省特別経費プロジェクト小中英語教育講演会（愛知教育大学小中英語支援室主催）でのワークショップ「英語学と英語教育」（於愛知教育大学、2011年7月24日）の内容と重なる部分があるが、教員免許更新講習の際に若干の修正をしている。小中英語教育講演会、また教員免許更新講習でお世話をいただいた方々、また参加者の方々に対して、御礼を申し上げます。

注

- 1 教員免許更新講習の会場となった、大学内の建物の名称のこと。
- 2 飛行機の例は、Chomsky (2000: 35) より引用。
- 3 Chomsky (2000: 36) を参照。
- 4 例文は Chomsky (2000: 20-21) より引用。
- 5 例文は Chomsky (2000: 36) より引用。
- 6 Chomsky (1965: 4) や Chomsky (1986: 3) を参照。
- 7 この点についての分かりやすい説明としては、安井 (1978: 125) また Larson (2010: 197) を参照。
- 8 Chomsky (1957: 26) を参照。
- 9 「一語句」については、岡田 (2001: 66-69) を参照。
- 10 下位範疇化枠とは、本文中で、動詞の後ろの[]に示した部

分のことを指す。 *bark*, V [+___]の場合、アンダーラインは動詞の位置を、またアンダーラインの後ろに何も表示がないことは、動詞の後ろに何も生じないことを示す。

- 11 動詞の個別的性質と文構造については、Chomsky (1965: 96) を参照。
- 12 例文は Anderson (2004: 205) より引用。
- 13 Kayne (1984)、また Radford (2009) を参照。
- 14 例文 (44d-e) では、当該個所をイタリックで示す。
- 15 鈴木 (2006) を参照。
- 16 Kayne (1983: 135-136) を参照。また二重目的語構文の二つの補部の間に、意味上 "have" の関係を認める点についても、同書を参照。
- 17 例文は Larson (1988: 377) より引用。
- 18 Larson (ibid.) またそこでの引用文献を参照。
- 19 (61)-(63) の例文は Arad (1998: 85-86) より引用。
- 20 同様の指摘については、大庭 (2011: 116) を参照。

参考文献

- Anderson, Stephen R. (2004) *Doctor Dolittle's Delusion: Animals and the Uniqueness of Human Language*, Yale University Press, New Haven.
- Arad, Maya (1998) *VP-Structure and the Syntax-Lexicon Interface*, MIT Occasional Papers in Linguistics 16, Distributed by MIT Working Papers in Linguistics.

- Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*, Mouton, Hague.
- Chomsky, Noam (1965) *Aspects of the Theory of Syntax*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*, Praeger, New York.
- Chomsky, Noam (1988) *Language and Problems of Knowledge: The Managua Lectures*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- Chomsky, Noam (2000) "Explaining Language Use," in Noam Chomsky, *New Horizons in the Study of Language and Mind*, pp. 19-45, Cambridge University Press, Cambridge.
- Greenbaum, Sidney and Randolph Quirk (1990) *A Student's Grammar of the English Language*, Longman, Essex.
- Kayne, Richard S. (1983) *Connectedness and Binary Branching*, Foris, Dordrecht.
- Larson, Richard K. (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19, 335-391.
- Larson, Richard K. (2010) *Grammar as Science*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts.
- 岡田伸夫 (2001) 『英文法と英語教育の接点』, 美誠社, 京都.
- 大庭幸男 (2011) 『英語構文を探究する』, 開拓社, 東京.
- Radford, Andrew (2009) *An Introduction to English Sentence Structure*, Cambridge University Press, Cambridge.
- 鈴木英一 (2006) 「英文法指導と学校英文法再考」, 『筑波英語教育』第 27 号, pp. 49-80, 筑波英語教育学会.
- 安井稔 (1978) 『素顔の新言語学』, 研究社, 東京.